

アンドレ・ブルトン「侮蔑的告白」について

—1917年6月24日、ジャック・ヴァシェとの再会のエピソード—

後 藤 美和子

プロローグ

我々がジャック・ヴァシェについて知るのには、まずアンドレ・ブルトンの書いたものを通してである。「私はどうあっても実名を要求する」と『ナジャ』に書くとおり^(注1)、ブルトンは実名とともに、ヴァシェの姿を「侮蔑的告白」に登場させている。

ブルトンは「侮蔑的告白」を1923年3月20日に脱稿するが^(注2)、それから間もない4月7日、「アンドレ・ブルトンはもう書かないだろう」と題するロジェ・ヴィトラックによるインタビューが、『ジュルナル・デュ・プープル』誌に掲載される。^(注3) このインタビューでブルトンは、「今から間もなく、私は書くのをやめるつもりです。例えば2カ月後には」と語る。そして、「この猶予は必要です。というのも、私をこの決定に押しやった動機を公にしたいと考えているからですし、また、後年になって私の態度を何か小説じみたやり方で解釈されたくないからです」と続ける。彼は「侮蔑的告白」を含む評論集『失われた足跡』の出版契約を、3月28日にガストン・ガリマールと結んだばかりであり、2カ月後という猶予がこの書物の出版を待たためのものであれば^(注4)、我々はこの書物の中に、ブルトンを沈黙へと誘う動機、あるいは、沈黙の代わりに彼が得ようとするものを読み取らなくてはいけない。すでにこのインタビューにおいて、ブルトンは沈黙を選ぶ理由として、ランボー、ロートレアモン、ジャリ、ヴァシェ、キュビズム、アポリネールについて熟考することで、文学を崩壊させようとしていたのだが、コクトー、リヴィエール、モラン、ポール・ヴァレリーの近作、『ヌーヴェル・リテレル』誌によって、「勝負は全くの敗北」に思われるからだと説明する。彼は、「詩ですか？ 詩は人が思っているようなところにはありません。それは語や文体の外にあるのです」と答える。そして、勝負に敗北した以上、「今後は、雑誌も本も新聞も、何も知らないでいたい。私は文学活動をやめるでしょう。『文学』誌ももう出ないでしょう」と語る。こうして沈黙への誘いが増大したまさにその時期に、ブルトンは「侮蔑的告白」を書くのであるが、そこには次のような文章がある。

「ジャック・ヴァシェが《ユーモア》(hなしの)^(注5)によって言おうとしていたことを定義したり、心を動かされることと侮蔑の原則との間で彼が始めた戦い^(注6)において、我々がどこにいるのかを正確に知らせることは、いまだ非常に難しい。我々の理解している意味での詩や、必要とあれば詩作品なしで存在する詩に、ユーモアを突き合わせるのには次の機会にしよう。今は、いくつかの明瞭な思い出を語るだけにする。」^(注7)

つまり、ブルトンはヴァシェを通して、詩作品なしで成立する精神状態としての詩の可能性を提示するのである。

第1章

「侮蔑的告白」に描かれたヴァシェの姿とエピソードを、ヴァシェの手紙や、ブルトンの手紙、あるいはそれ以外の人々の証言から追認する試みに、どのような意味があるだろうか。書かれたことが他の資料で確認できれば、登場人物を創作したり、「小説」的描写をすることを排除しようとする、ブルトンの反・小説の姿勢が確かめられることになる。それでは、事実が確認されないままに、物語が周囲の人々に共有されていたらどうだろう。

これから取り上げるのは、戦場に復帰したヴァシェとパリのブルトンの、1917年6月24日の『ティレジアスの乳房』初演時における、再会のエピソードである。「侮蔑的告白」には、1916年にナントの病院でヴァシェと出会ったこと、ヴァシェが再び戦場に行くまでの間の二人の交際、1917年に二度パリで再会した時のこと、1918年に受け取った最後の手紙、そして翌年の彼の死について描かれている。つまり、ブルトンは自分がつきあい、自分の前に立ち現れたヴァシェのことしか書いておらず、生年や家族、自分と知り合う以前の彼の友人たちについては触れていない。けれども本論考を始めるにあたり、敢えて伝記的要素を補うなら、次のようになる。(注8)

ジャック・ヴァシェは1895年9月6日、ブルターニュの町ロリアンに生まれた。幼少期を軍人である父の赴任先だったインドシナで過ごした後、ナント高校(現クレマンソー高校)に入り、ジャン・サルマンらの文学活動に参加する。1913年にバカロレアを取得すると、ナントの美術学校に進学する。翌14年8月に第一次世界大戦が勃発し、兄弟のように育てられた4歳年上の従兄ジャンが8月のうちに戦死する。ヴァシェも12月に動員され、1915年6月に戦場に送られる。8月、「死体の塹壕」と呼ばれる前線に送られる前に、サルマンに遺書めいた手紙を書く。(注9) 9月、擲弾兵のヴァシェは榴弾破裂によってふくらはぎを負傷し、10月にナントに戻され、ボカージュ通りのギストー高校(現存)に作られた臨時病院に入院する。同病院にはアンドレ・ブルトンとテオドール・フランケルが医師補として配属されており、三人は友人になる。翌1916年5月、ヴァシェは戦場に復帰するが、英語が使えたため、今度は英国軍通訳になる。彼の父方の祖母は英国人だった。ヴァシェとブルトン及びフランケルとの間に文通が始まるが、ブルトンはヴァシェの死後、それらをまず第一次『文学』誌に掲載し、次いで『戦場からの手紙』としてオー・サン・パレイユ社から出版する。彼らは休暇を利用してパリで待ち合わせることもあった。ヴァシェはサルマンとも交友を続けている。また、ナントの病院で知り合った看護婦ジャンヌ・ドゥリアンとも交際し、彼女に多くのイラスト入りの手紙を送る。しかし、戦争終結後の1919年1月6日、動員解除を待たずに、ヴァシェはナントのホテル・フランスで、友人ポール・ボネと共に死んでいるのが発見される。知人ら五人で大量の阿片を摂取した結果である。ブルトンが事の顛末を知るのは1月13日から1月22日の間である。(注10)

それでは、「侮蔑的告白」より、1917年6月24日のエピソードの前半を引用しよう。

「1917年6月23日、午前2時頃(注11)、治療中のピティエ病院に戻ってくると、私は彼からの書置きを見つけた。彼の『手紙』(注12)の冒頭を飾る例のデッサンも一緒だった。翌日の『ティレジアスの乳房』の初演で会おうと書いてあった。私はモーベル座でジャック・ヴァシェと再会した。第一幕が終わったところだった。一人の英国の将校が、一階席で騒ぎを起こしていた。まさしくそれは彼だった。上演の騒乱が、彼

を異常なまでに興奮させてしまったのだ。彼は拳銃を手に会場に入ってきて、観客に向けて発射するぞと言っていた。実のところ、アポリネールの「シュルレアリスム劇」は、彼には気に入らなかった。彼はこの作品をあまりに文学的だとみなし、衣装のことで強く非難していた。」(注13)

アポリネール作『ティレジアスの乳房』は1917年6月24日(日)の午後4時半から、モーベル座で上演されることになっていた。休暇の許可をとってパリに行き、この芝居を見ようと考えたヴァシェは、6月4日にブルトンとフランケルに宛て、以下の手紙を書く。句点を極力廃してハイフンを多用する、ヴァシェ独特の電報のような文体である。(注14)

「今度(15日か20日)(注15)―パリに行く時、あなた(注16)に会いたい―騙し屋の郵便局が片方の手紙を紛失する場合もあるから、ポーランド人(注17)にも同じことを書いた―その時期にあなたがパリにいるかどうか、返事をくれないか?」〔ブルトン宛〕

「これから厄介にもパリに行って、あなたに会うつもりだ―15日か20日頃、パリにいて欲しい。」〔フランケル宛〕

しかし、戦場のヴァシェに休暇の許可はなかなか下りない。結局、パリ到着が上演前日の夕刻になることを、ヴァシェは6月16日付の手紙で二人に告げる。

「パリに行くつもりだ―(やはり休暇が下りるのが遅くなった)―ギョーム・アポリネールのシュルレアリスム劇の上演のために―大して遅刻はしないだろう、多分―(中略)僕はパリに、おそらく23日の午後に着く―「ロトンド」(注18)にアペリティフの時間に来てくれないか、6時半頃に―?―できれば、この手紙を受け取ったら返事をくれ、あなたか詩人(注19)、あるいは両方に、どこで会えるのかを教えてほしいのだが?でも、悪ふざけを企むのはよしてくれ―もちろん、面白いだろうが―でも、光の都市(注20)には、ほんの少ししか滞在できないんだ―到着は―オルセー河岸駅に―Aから出発して…4時半…6時頃―23日の午後だ。」〔フランケル宛〕

「M. J. コクトー(注21)にも手紙で書いたが、嬉しいことに、もうすぐあなた方に会える。23日の午後には、僕はパリに到着できるだろう。だからきっと、ギョーム・Aの『ティレジアスの乳房』を見に行けると思う―それについて―まあ、これはまた別の話だ―僕の意見は当日の午後に言おう―ジッドが非情だと、本当にあなたに言っただろうか?」〔ブルトン宛〕

ブルトン宛の手紙には、ヴァシェは23日6時半のロトンドでの待ち合わせについて書いていない。その連絡が、フランケルからブルトンに伝わったかどうか分からない。「侮蔑的告白」では、ブルトンとヴァシェの再会は、24日にモーベル座でなされたことになっている。そこで、フランケルの手帳から日付の最も近いものを探すと、6月26日の次のメモが見つかる。

「日曜日に上演されたアポリネールの『ティレジアスの乳房』、滑稽な脈絡のなさ、舞台装置、《エスプリ・ヌーヴォーに沿った》演出。興味を引く劇ではあるが優れたものではない。ギョーム・アポリネールよ、あなたの切開した頭(注22)の開口部から飛び去ったのは、あなたの心だろうか、あなたの詩人としてのリリカルな心だろうか。(中略)我々がナントで愛したジャック・ヴァシェとパリで会う。皮肉屋、ユーモア屋、恐ろしいまでの担ぎ屋、貴族的で侮蔑的な嘘つきに。」(注23)

このメモから、フランケルが『ティレジアスの乳房』初演を見に行き、それを機にヴァシェと再会したことが確かめられる。しかし、前日のロトンドでの待ち合わせについては手帳に書かれていない。

「侮蔑的告白」によれば、ブルトンは前日の真夜中の2時にピティエ病院に戻り、訪ねてきたヴァシェと入れ違いになる。「治療中のピティエ病院」とあるのはどういうことだろう。アンリ・ベアール『アンドレ・ブルトン伝』及びマルク・ポリゾッティ『アンドレ・ブルトン』によれば^(注24)、1917年1月8日にブルトンはパリの衛生隊第二十二部に配属され、ヴァル・ド・グラース陸軍病院で医学講義を受ける。そして同月末にピティエ神経医学センターの通学助手として、バビンスキー教授の医局に回される。ところがブルトン自身が原因のはっきりしない病気になり、2月20日に勤務先の病院に入院してしまう。4月4日には病室を抜け出すようにして、アポリネール宅を訪問しているが、その後、熱がぶりかえし、4月26日に盲腸炎の手術を受ける。その後も回復は遅れ、8月10日にやっと退院し、9月1日からヴァル・ド・グラース病院でインターンを始めたとある。すると、6月23日の夜中の2時にピティエ病院に戻ったというのは、治療継続中の患者としてだったと考えられる。自由に外出できるほどには回復したものの、学業や助手としての仕事は再開していない時期だったのだろう。

しかし、ヴァシェがピティエ病院に残したとされる書置きとデッサンについては、疑問が生じる。まず、書置きの存在が確かめられていない。そして、パリ行きが23日になったことを告げる前述の16日付の手紙に、「僕の返事には、デッサンみたいなものを—インクだけで描いた—同封させてもらおう」とあることから、23日の書置きに添えられ、『戦場からの手紙』の挿絵に使われたデッサンというのは、実は16日付の手紙に同封されたものことではないかと思えてくるのだ。『戦場からの手紙』の初版本(1919年)を見ると^(注25)、問題のデッサンは黒インク一色で描かれ、7頁目に収められている。絵の中では、将校の服を着たひとりの男が、ホールドアップをして目を剥いている敵兵に、平然と銃を向けている。足元には死体の山があり、カラスが一羽とまっている。背後にある黒い染みは、荒涼とした戦場から空に飛び散る血のようにも、空から舞い降りるカラスや秃鷹の群れのようにも見える。

また、ヴァシェからブルトンに宛てた4月29日付の手紙には、「ひとりの男を同封する一題は、『強迫観念』—あるいは—そうだ、『和と残余との戦い』とでもしようか—そうだ」とあり、『戦場からの手紙』で使われたのがこの絵だとも考えられる。1921年のサロン・ダダには、「和と残余との戦い」という題の作品がヴァシェの名で出品されたが^(注26)、図版がないため、どの絵なのかが確定できない。それとも、「侮蔑的告白」の記述通り、この絵は23日の夜更けに、ヴァシェ自身がピティエ病院に置いてきたものなのだろうか。そして彼はこの絵を、ブルトンを待ちながら描いたのだろうか。というのも、1917年2月21日、ヴァシェは役者になった友人ジャン・サルマンに会いにオデオン座を訪れ、楽屋で二枚のデッサンを描いているからだ。もっとも、化粧粉をカラフルに使い、オデオン座のネーム入りの便箋に描かれた後者は、いかにも短時間で仕上げられたものに見える。^(注27) ここでは、「侮蔑的告白」の執筆時、ブルトンが『戦場からの手紙』の挿絵を、1917年6月24日におけるヴァシェと結びつけて考えていた可能性を指摘しておく。

第2章

続いて「侮蔑的告白」には、ジャンヌという少女が登場する。該当箇所を引用しよう。

「会場から出ると、彼は一人でパリにいないのではないと私に打ち明けた。前夜、彼はピティエ病院を出てから、私と過ごそうと思っていた時間を散歩に費やしたのだった。そして、リヨン駅の近くで、彼は幸運にも、二人の男に乱暴されていた「少女」を助けてやることができた。彼はその子を自分の庇護下に置いたのだった。」(注28)

この少女がジャンヌである。ヴァシェとジャンヌはあてもなく汽車に乗り、フォントネー・オ・ローズで降りる。(注29)

「そこで、二人はまた歩き始めたが、ジャンヌに懇願され、彼はついに宿探しに取りかかった。午前4時頃だった。ある詩的な符合によって、昼間は葬儀屋を営む一人の街灯消しが、彼らを泊めてくれた。翌日、つまり私たちが会う約束をしていた日、彼らは遅くに目を覚まし、モンマルトルに来るだけの時間しかなかった。ジャックは少女に何スーかのボンボンを与え、ある食料品店で待っているように言っておいたのだ。」(注30)

街灯消しが昼間に葬儀屋になることを、ブルトンは何故、「ある詩的な符合によって」と記したのだろうか。その人夫は早朝に起き、街灯を消し、そして葬儀屋の仕事を始める。つまり、ヴァシェが明け方になって眠りに落ちるや、灯は消え、人夫は葬儀をするのだ。このことをブルトンは、ヴァシェが麻薬で眠りながら死んでいったことの予示ととったのではないだろうか。人夫はヴァシェを弔うのだ。彼らがなかなか起きなかったことも、ヴァシェの死への接近を現わしているように思えるし、ヴァシェの深い眠りが二人でなされたことも、彼が友人と二人で死ぬことの予兆として読むことができる。

ジャンヌについては、フランケルもまた手帳に書き残している。まず、1917年6月26日の『ティレジアスの乳房』上演についてのメモに続き、「従順でおとなしく、心のきれいなジャンヌ。ああした女たちの生き方…(中略)一夜を共にした女とは、二度と会わないという願望。A.Bのアジニスム」(注31)と彼は書く。「従順でおとなしい」という特徴は、「侮蔑的告白」で描かれたものと一致している。それに続く6月29日、31日のメモから、東部戦線に向かうフランケルがロシア行きの船に乗ったことが分かる。そして7月10日、フランケルはいまだ「灰色で穏やかな」海の上を走りながら、

「もう夜はないが、しかし眠りはある。眠りと苦しみ。6月26日の狂った乱脈」(注32)

と書く。またしても6月26日であるが、『ティレジアスの乳房』上演の2日後であるこの日、ヴァシェも一緒だったのだろうか。「侮蔑的告白」の続きを見てみよう。

「彼は午後の終わりに私と別れ、彼女を迎えに行った。まだほんの少女で、見たところ、とても素直そうだった。彼女の肩には、彼の将校証がひもで斜めにかかっていた。彼女は私たちと一緒に、ラ・モール(注33)までやってきた。そこでジャック・ヴァシェは私に、戦場で描いたクロッキーを数枚、とりわけ、かの《ラフカディオ》のための何枚かの習作を見せてくれた。ジャンヌは明らかに彼の心を和らげており、彼女をリアリッツに連れて行く約束も出来上がっていた。さしあたり、ヴァシェはバステューヌあたりのホテルに、彼女と泊まる予定だった。いつもながらに振り返りもせず、彼がまもなく一人で出発したことは付け加えるまでもないだろう。ジャンヌが全てを差し出したと語る犠牲や…アトリエでの二日間について、まったく気にとめることなく」(注34)

この箇所を読む限り、ヴァシェは6月26日には一人で発ってしまったようだ。それでは、フランケルが「狂った乱脈」と書いた「6月26日」とは何なのだろう。ここで、1917年9月6日付のブルトンの次の手紙が、一つの手掛かりを与えてくれる。(注35)

「このEの話とは何のことだ？ 僕をからかっているのか？ それとも、僕らの友人Vの実に魅力的な女友達、君の同情心を浄化する使命を持っていたのか？ 厳しい教訓になるだろう。美しい話だ、本当に。それを話してくれないか。ここには全てがそろっている。あの子のおとなしさ、駅での物語風なシーン、列車、フォントネー、葬儀屋兼街灯消し人夫の部屋、ティレジアスの乳房とモンマルトルにある小さな食料品店兼軽食堂、ラ・モールとラフカディオの肖像画、拳銃と将校証、バスティーユのホテル、握手をして静かに立ち去ったジャック・Vの魅力的な出立、まさにその晩の君の夕食と、君の言うことを信じるならば、それに続いて君に沸き上がった同情心。どうか、6月26日の夜について、詳しく教えてくれ。26日だったな。26+21=17！(注36) 僕も僕自身でこの見事な物語について書くつもりだ。それについての材料は、ほとんど全て持っている。構わないか？(注37) 近いうちに、君に物語の第一稿を送るつもりだ。君のおかげで知ったこのドラマティックな場面は、ラストに上手く収まるだろう。」

これまで引用してきた「侮蔑的告白」のエピソードが、この手紙の中にすでに凝縮されて現れているのが分かる。僕らの友人Vというのは、ジャック・Vすなわちヴァシェのことだろう。Eというイニシャルに疑問は残るものの、魅力的な女友達とはおそらくジャンヌのことで、ヴァシェが去った26日の晩、この手紙の宛先人はジャンヌに同情し、ブルトンのいない所で彼女と会ったのかもしれない。下線で強調しつつ、ブルトンはこの一連のエピソードについて書こうと心に決めている。そして、手持ちのピースを並べた後、未知のピースを持っている相手に、その提供を求めているのだ。1917年当時にブルトンとヴァシェの両方と友人であった人物は限られる。手紙の内容からも、「26日の晩」という語の符合からも、これはフランケルに宛てたものと考えるのが妥当だろう。

さらに、この手紙に列挙されているエピソードの順番を見ると、「ラ・モールとラフカディオの肖像、拳銃と将校証」という具合に、「拳銃」の語が、「ラフカディオ」の語の直後に置かれているのが分かる。将校証を肩に下げたジャンヌを前に、ヴァシェが拳銃を見せびらかしたのだろうか。ここには『ティレジアスの乳房』の会場での騒ぎについての記述がない。それでも、単語がこのような順に配置されたのは、ラフカディオから拳銃へとつながる連想が、ブルトンにおいて働いたためではないだろうか。(注38)

第3章

『ティレジアスの乳房』初演は、1917年6月24日4時半にモーベル座で上演されることになっていたが、実際の開演はもっと遅かった。ブルトンは1951年のアンドレ・パリノーとの対話で、「上演は定刻よりも2時間近く遅れて始まった。(中略) 待たされたことですでに苛立っていた観客たちは、第一部を怒号とともに迎えた」と語っている。(注39) そして、「一階席のある場所で騒ぎがぶり返したが、理由はすぐにわかった。それはジャック・ヴァシェで、彼は英国軍将校の制服姿で入って来たところだった。周りの調子にすばやく合わせ、彼はすでに拳銃を構えており、それを気まぐれに使うかに見えた」とブルトンは続ける。「侮蔑的告白」と比べ、ヴァシェの行動の自立性が弱められているように思えるが、30年以上経っても、騒ぎそのものの描写に変更はない。ところで、ピーター・

リードはその著書『アポリネールと「ティレジアスの乳房」』^(注40)の中で、『ティレジアスの乳房』初演に訪れた著名人の名を60人以上も挙げているが、他方で「ブルトン、ヴァシェ、スーポー、アラゴン、さらにはプーランクといった無名の若者たちについては、何の報告もない」と書いている。また、拳銃を振りかざしたとされるヴァシェの行為について、マルク・ポリゾッティは『アンドレ・ブルトン』において、「アルベール・ピロの詳細な記事はもちろん、この劇について書かれた20もの批評の中で、誰もヴァシェの演じた役回りについて触れていない」^(注41)と書いている。

劇評の中ばかりか、26日のテオドール・フランケルの手帳にも、9月6日のブルトンの手紙にも、ヴァシェの拳銃騒ぎについての記述はない。この事件について最初に記したのは、意外にもルイ・アラゴンである。アラゴンは『シック』誌1918年3月号に「1917年6月24日」と題する記事を寄せ、『ティレジアスの乳房』第一幕を要約した後に次のように書く。

「会場は抗議し、同時に賞賛していた。シプリアン嬢は手を拍いていた。我が伝説的友人ヴァシェは会場に向けて拳銃を発射しようとしていた。あるカップルは涙を流して聞いていた」^(注42)

しかし、ブルトンとアラゴンの出会いは、ブルトンが1917年9月にヴァル・ド・グラースにインターンとして配属された後である。上演日である6月24日には二人はまだ知り合っておらず、ブルトンの友人のヴァシェのことも、当然アラゴンは知らなかったはずだ。もちろん、そのことはアラゴンがモーベル座にいたことの反証にはならない。また、劇に対するアラゴンの評価も、ブルトンのものとは異なっている。「新世代と旧世代の間を隔てる溝の深さを、この晩ほど感じたことはなかった」^(注43)とブルトンが語る一方で、アラゴンは「私は一つの比類なき陽気さの思い出を、1917年6月24日のこの午後から、ずっと持ち続けるだろう。この陽気さは、哲学的に理屈をこねまわす気苦労から解放された演劇を、未来に向けて垣間見させてくれる」と書いている^(注44)。『ティレジアスの乳房』を旧時代に位置づけたブルトンに対し、アラゴンはそれを未来に結びつけて語っている。けれども、ヴァシェの拳銃騒ぎに関しては、アラゴンが「見知らぬ将校」ではなく、「わが伝説的友人ジャック・ヴァシェ」と書いていることから、アラゴンが自分で目撃したのではなく、ブルトンからアラゴンに話が伝わり、共有されたものと考えられる。「侮蔑的告白」の発表は1923年なので、騒ぎはニュースソースよりも5年も前に、伝播先で活字化されたことになる。

スーポーに関してはどうだろう。彼は『ティレジアスの乳房』の上演のことを繰り返し回想しているが、いずれも半世紀以上も経ってからのものである。まず、1968年に『マガジン・リテレル』誌第16号に載った、編集長ジャン＝ジャック・ブロシエによるインタビュー「文学をしたとして閉め出され」^(注45)であるが、いつブルトンに会ったのかという問いに対し、スーポーは1917年だと答え、ブルトンを介してアラゴン、フランケルと知り合いになり、ヴァシェについての話も聞いたと答える。そして、「私は例の『ティレジアスの乳房』上演の時にヴァシェを見ました」と明言する。さらに、「そこでヴァシェは、英国の将校に変装して、拳銃を振り回していたのですか？」と尋ねるブロシエに対し、スーポーは「変装していたわけではありません。彼は実際に英国軍の通訳だったので、その格好をしていたわけです」と説明する。

けれども、1978年～79年にセルジュ・フォーシュローによって行われたインタビューでは、「あなたはヴァシェをご存じだったのですか？」と問われ、「私はヴァシェと個人的に知り合いではありませんでした。けれども何か月も何か月も、ブルトンは自分を魅了した青年について、我々に話し続け

ました」と答える。^(注46)そして、「ヴァシェはいつも、友人や知り合いを驚かしたり憤慨させたりしようとしていました。私は『ティレジアスの乳房』上演をルネ・モーベル座の舞台上から見ました。私はアポリネールからプロンプターをするように頼まれていたのです。ヴァシェが上演中に拳銃を振り回していたかどうか、私は覚えていません。けれども、アラゴンとブルトンの言うことはそのままに信じなくてはなりません。典型的な挑発です。それ以上です。ヴァシェは人を驚かし、自分も驚かすことで、自分を解放する必要があったのです。ロシアン・ルーレットだってしかねませんでした」と語る。^(注47)こうしてスーポーは、ヴァシェの拳銃騒ぎを目撃したという先の発言を取り下げてしまうが、ロシアン・ルーレットの例から、スーポーがヴァシェの行為を偶発性や無償性と結びつけていたことが読み取れる。1981年の回想録『忘却の記憶』では、このヴァシェの事件はずっと後ろに引いてしまう。彼はブルトンと一緒に上演会場に行きはしたものの、「プロンプター用の狭い場所に押し込められていたため、私は観客や批評家のリアクションを見ることができなかった」と書くのみである。^(注48)

こうして、まだヴァシェを知らなかったはずのアラゴンが『ティレジアスの乳房』の会場で拳銃を振りかざすヴァシェを見たとき、プロンプターの仕事で観客を見ていなかったはずのスーポーが、ヴァシェを見たとき一度は語る。そのままに信じなければならぬというスーポーの言葉通り、彼らはブルトンの話を信じることでヴァシェの行為を共有し、その意味を自らに引き受けようとしたのだ。では、その意味とは何だろうか。

1917年6月4日付のヴァシェのフランケル宛の手紙の余白には、右手に銃を持ち、両手を広げて踊るような格好の兵士が、近くに立つ兵士に向けて銃を発射する様子が描かれている。そしてこの手紙には、「一緒になって人々を殺したり、僕が消えてしまうような小説を書きたまえ」という呼びかけがあり、『『抜け穴』^(注49)とアポリネールの『詩人』^(注50)を受け取った」とも書かれている。ヴァシェは8月18日付のブルトン宛の手紙にも、「僕はラフカディオにわずかだがユーモアを認める一彼は本を読まず、楽しい実験においてしか創造しないからだ一暗殺みたいな」と書く。ヴァシェが評価する人物は数少ないが、彼はアンドレ・ジッド作『法王庁の抜け穴』の登場人物ラフカディオに、自らを重ねていたのだろうか。

「侮蔑的告白」によれば、ヴァシェは『ティレジアスの乳房』の上演にあたり、「《ラフカディオ》のための習作」を持参していた。現在見つかっているヴァシェの絵画作品の中に、そうしたタイトルのものではない。けれども『戦場からの手紙』に使われた絵についてブルトンが、上演前日にヴァシェがそれをピティエに持ってきたと書いたことで、その絵は「《ラフカディオ》のための習作」の等価物となる。そして、銃を構える絵の中の将校が、上演会場におけるヴァシェの行動を予告しているかに見えてくる。さらに、ブルトンは翌年6月に「ラフカディオのために」^(注51)と題する詩を書くが、「これほどたくさんの戦争に、僕は勝ちほしくないだろう」という一行はヴァシェの手紙からの引用であり、しかもその手紙は、『ティレジアスの乳房』を見にパリに行くことをフランケルに告げた、1916年6月16日付のものだった。アラゴンもまた、ジッドを訪問した際にラフカディオとヴァシェを話題にしたことを想起し、「その二人は同一人物だった」と記している。^(注52)

しかし、ブルトンらがラフカディオとヴァシェを重ねたのは、殺人においてではない。『法王庁の抜け穴』の作中でラフカディオは、偶然同じ車両に乗り合わせた男を前に、「動機のない犯罪。警察にとって、なんと厄介なことか。(中略)野原に何か火が見えないうちに、僕が急がず12まで数え終

えたなら、この男は助けてやる」^(注53) と考える。そして彼は数え始めるが、10まで来たところで火を見つけ、男を線路に突き落とす。確かにラフカディオは男を殺したが、彼の意識がその決定を下したとはいえない。ブルトンは『黒いユーモア選集』でジッドを取り上げ、「他よりはるかに重大な、《無意識の異議申し立て》のようなものがラフカディオから始まる」^(注54) と記している。火を見るか否かという偶然性に身を委ねたことが、ラフカディオの成した快挙だった。同様に、会場で拳銃を振りかざすヴァシェの姿がブルトンたちに共有されたのは、ヴァシェの行為が、弾の飛ぶ角度も、弾が出るか否かも、自分が引き金を引くかどうかとも知らない、つまり無意識に全権限を譲渡する態度の表れとして受け止められたからではないだろうか。彼らはそこに、論理から逃れた新しい生き方の兆しを見ようとしたのだ。

エピローグ

ヴィトラックのインタビューで廃刊が予告されたものの、『文学』誌は1922年5月に第10号を出す。「『文学』誌の読者は減る一方だし、もう間もなく25人にも満たなくなるでしょう」とブルトンはそのインタビューで述べていたが、実際、ピカビアの表紙がスキャンダラスとみなされ、雑誌は店頭から閉め出された。^(注55) 夏になり、ブルトンは両親の住むロリアンで20篇ほどの詩を書く。詩篇「ローズ・セラヴィ」には、インタビューのタイトルだった「アンドレ・ブルトンはもう書かないだろう」という言葉が付され、『地の光』としてまとめられるそれらの詩によって、かの沈黙への誘いは乗り越えられたかに見える。けれども、翌年4月に、「侮蔑的告白」を含む評論集『失われた足跡』が予定より1年遅れて刊行されるや、ブルトンは再びオートマティスムへと引き寄せられ、「溶ける魚」の詩群が書かれる。6月、第2次『文学』誌がついに終刊する。そして、その夏、ブルトンはオートマティスムの理論化を図り、『シュルレアリスム宣言』を書き進めることになる。

注

- (1) André Breton, *Nadja, Œuvres Complètes I*, Gallimard, 1988, p. 651.
- (2) 1920年12月20, 27日, 1921年1月4日, 2月9日のジャック・ドゥーセへの手紙を下敷きになっているとされる。André Breton, *Ibid.*, p. 1222.
- (3) Roger Vitrac, 《André Breton n'écrira plus》, *le Journal du peuple*, le 7 avril 1923, in André Breton, *Ibid.*, p. 1214-1216.
- (4) Henri Béhar, *André Breton, Le grand indésirable*, Calmann-Lévy, 1990, p. 146-147.
- (5) () はブルトン自身による。「ユーモア」は *humour* と書くのが普通だが、ヴァシェは *h* を省いた *umour* という綴りを使っていた。
- (6) ヴァシェが与したのは後者である。「侮蔑的告白」には、「ジャック・ヴァシェは《あらゆる事に、ほとんど何の重要性も与えない》技の大家として通っていた」とも書かれている。
- (7) André Breton, *La Confession dédaigneuse, Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 198.
- (8) ヴァシェの伝記的記述にあたって使用した参考文献は以下のとおりである。
Michel Carassou, *Jacques Vaché et le groupe de Nantes*, Jean-Michel Place, 1986.
Jacques Vaché, *Soixante-dix-neuf lettres de guerre*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1989.
Jacques Vaché, *Quarante-trois lettres de guerre à Jeanne Derrien*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1991.

Jean Sarment, *Corrélpondances à l'aube du surréalisme*, La nouvelle Revue Nantaise, no 4, 2004.
Bertrand Lacarelle, *Jacques Vaché*, Grasset, 2005.

- (9) 筆者はこの手紙をナント市のメディアティック・ジャック・ドゥミの郷土史資料室 (la salle d'histoire locale de la Médiatique Jacques Demy) にて閲覧した。空色の色鉛筆のようなもので書かれた、丁寧な筆跡の手紙である。その中でヴァシェは、自分が前線から戻らなかった場合に備え、サルマンに「君は好きに燃やして構わない。君に任せる。きっと君は、僕が自分でするのと同じようにやってくれるだろうから」と書いている。
- (10) ブルトンは1月13日にヴァシェに宛て、コラージュからなる手紙を送っている。また、1月22日付のトリスタン・ツァラ宛の手紙には、ヴァシェの死について書かれている。
- (11) つまり、日付は6月24日である。
- (12) 『戦場からの手紙』のこと。
- (13) André Breton, *La Confession dédaigneuse*, *Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 200.
- (14) 以下、ヴァシェのブルトン宛及びフランケル宛の手紙は、Jacques Vaché, *Soixante-dix-neuf lettres de guerre*, réunies et présentées par Georges Sebbag, Jean-Michel Place, 1989 を出典元とする。
- (15) 3日付の母親宛の手紙には、15日か20日にナントに行くつもりだと書いている。休暇を使って、パリとナントの両方に行くつもりだったのだろう。
- (16) ヴァシェは手紙で「アンドレ」とファースト・ネームで呼びかけるが、友達言葉の tu (きみ) ではなく、丁寧語の vous (あなた) を使っている。
- (17) テオドール・フランケルのことを、ヴァシェはこう呼んでいた。
- (18) ロトンド (La Rotonde) はモンパルナスのカフェ。
- (19) ブルトンを指す。ただし、poète を pohète という綴りに変え、「詩人」をからかいの対象にしている。
- (20) パリを指す。
- (21) 実はフランケルのこと。フランケルはコクトーの名を騙って、『シック』誌第17号(1917年5月)に「夜のレストラン」という詩を載せるが、それは行の最初の一字を縦につなげると「哀れなビオ氏」となるものだった。『シック』はアルベール・ビオの雑誌である。
- (22) アポリネールは第一次大戦に志願し、頭部を負傷した。
- (23) Théodore Fraenkel, *Carnets 1916-1918*, Éditions des cendres, 1990, p. 83.
- (24) Henri Béhar, *André Breton, Le grand indésirable, Ibid.*
Mark Polizzotti, *André Breton*, Gallimard, 1999.
- (25) アイオワ大学所蔵。デジタル版が公開されている。
- (26) Michel Sanouillet, *Dada à Paris*, Flammarion, 1992, p. 288-299.
- (27) ナント市のメディアティック・ジャック・ドゥミ所蔵。
- (28) André Breton, *La Confession dédaigneuse*, *Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 200.
- (29) パリ・リヨン駅からフォントネー・オ・ローズまでは、現在 RER の B 線で 15 分ほどの距離である。
- (30) André Breton, *La Confession dédaigneuse*, *Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 201.
- (31) Théodore Fraenkel, *Ibid.*, p. 83. アジニスム (女性嫌悪主義) はフランケルの造語と思われる。ヴァシェの文通相手だったもう一人のジャンヌ (ジャンヌ・ドゥリアン) も、1990年のジョルジュ・セバグとの対話の中で、「ブルトン氏は女性嫌いでした。感じもよくなくて、失礼なほどでした。私たちが廊下で彼とすれ違っても、決してあいさつをしませんでした」と述べ、一方でヴァシェとは気が合い、彼の病室へ、トランプやおしゃべりをしに行ったりと回想している。 *Quarante-trois lettres de guerre à Jeanne Derrien, Ibid.*
- (32) Théodore Fraenkel, *Ibid.*, p. 88.
- (33) ラ・モール (Rat Mort) はモンマルトルのカフェ。
- (34) André Breton, *La Confession dédaigneuse*, *Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 201.
- (35) この手紙はパリの手紙・原稿博物館が所蔵し、2011年10月2日から2012年1月29日まで、ジュネーブ

のバイエラー財団美術館の「パリのシュルレアリスム展」にその一部が展示された。筆者が手紙・原稿博物館に問い合わせたところ、手紙全文のデジタル写真及び引用の許可をいただくことができた。感謝と共にコピーライトを明記する。

Lettre autographe signée d'André Breton, datée 《jeudi 6 septembre 1917》, Coll. Privée / Musée des lettres et manuscrits - Paris.

Cette lettre fait partie des collections du Musée des lettres et manuscrits, qui m'en ont transmis une transcription et m'ont autorisé à l'utiliser. Je tiens ici à les en remercier.

- (36) 6月26日の3週間後が7月17日だったということだろう。
- (37) 下線はブルトン自身による。
- (38) この1917年9月6日の手紙の中で、ブルトンはアポリネールが『ティレジアスの乳房』の序文に書いた「演劇改革とは言わないまでも、各自で努力するため、私はモデルに戻るべきだと考えたが、それはモデルを写真のように模倣することではない。人は歩行を模倣しようとして、脚と似ても似つかない車輪を創造した。こうして人は、そうとは知らずにシュルレアリスムを創り上げたのだ」の箇所を受け、「僕は『ティレジアスの乳房』の序文に協力したと言える。人間は、運動を再現しようとして丸い車輪を作るが、自分の見た移動器官〔=足〕との間に繋がりはない。機関車の動力装置には、それを作った人の思考の出発点にあった〔足と車輪の間の〕連結作用が見い出される。シュルレアリスムはこの創造と完成とを含んでいる」と記している。〔 〕は筆者による補足。「シュルレアリスム」の語はアポリネールが『ティレジアスの乳房』の序文に使ったのが初出であるが、この手紙から、ブルトンは自分がその序文に貢献したと考えていたことが分かる。また、この手紙には、ヴァシェがブルトンに宛てた同年8月18日付の手紙の一部が書き写されている。
- (39) André Breton, *Entretiens 1913-1952, Œuvres Complètes III*, Gallimard, 1999, p. 441.
- (40) Peter Read, *Apollinaire et les Mamelles de Tirésias*, PUR, 2000, p. 198.
- (41) Mark Polizzotti, *Ibid.*, p. 73.
- (42) Louis Aragon, 《Le 24 juin 1917》, *SIC*, no 27, mars 1918, Jean-Michel Place, 1997, p. 206-207.
- (43) André Breton, *Entretiens 1913-1952, Ibid.*, p. 441.
- (44) Louis Aragon, *Ibid.*, p. 206-207.
- (45) このタイトルはスーパーがシュルレアリスム・グループから除名された理由を端的に表している。彼はこのインタビューの中で、「私は1926年に文学の罪で除名されました、アルトーやヴィトラックと同時期です。ヴィトラックとアルトーは演劇、すなわち文学をしたからです。私は、本を出し過ぎるとして非難されました」と答えている。
- Entretien. Philippe Soupault: 《Exclu pour cause de littérature》, *Magazine Littéraire*, no. 16, 1968, p. 20-21.
- (46) Philippe Soupault, *Vingt mille et un jours*, Belfond, 1980, p. 50.
- (47) *Ibid.*, p. 247-248.
- (48) Philippe Soupault, *Mémoires de l'Oublie*, Lachenal & Ritter, 1981, p. 42.
- (49) アンドレ・ジッド作『法王庁の抜け穴』のこと。
- (50) 『虐殺された詩人』のこと。
- (51) André Breton, *Mont de Piété, Œuvres Complètes I, Ibid.*, p. 13.
- (52) Louis Aragon, *Projet d'histoire littéraire contemporaine*, Digraphe, 1994, p. 35.
- (53) André Gide, *Les Caves du Vatican*, Gallimard, 1999, p. 645.
- (54) André Breton, *Anthologie de l'humour noir, Œuvres Complètes II*, Gallimard, 1992, p. 1042-1043.
- (55) Henri Béhar, *André Breton, Le grand indésirable, Ibid.*, p. 147.

(ごとう みわこ 総合教育センター)